

第 64 回全日本プロ選手権自転車競技大会レポート

64 回を迎えた全日本プロ選手権自転車競技大会は、5 月 29 日に和歌山競輪場で開催された。同競輪場での全プロ大会は初となる。昨年の地区プロ大会での成績優秀者を中心に 17 5 名の選手が集い、それぞれの脚力と技能を競い合った。

スプリントは渡邊一成（福島）が 3 度目の優勝。ケイリンは深谷知広（愛知）が鮮やかな捲りを決めて初の栄冠。1 km タイムトライアルは早坂秀悟（宮城）が連覇。4 km 個人パーシュートは渡邊正光（福島）が初優勝。エリミネーションは小林潤二（群馬）が 2 年連続 3 度目の戴冠。チームパーシュートは南関東地区が大会記録で優勝。チームスプリントは関東地区が 13 年ぶりの優勝を果たした。

競技当日は天候に恵まれて 1051 名の観客が熱戦に酔いしれた。

ケイリン



ケイリンを優勝した深谷Ⓢと 2 位の新田Ⓢ、稲川Ⓢ

ケイリンは深谷知広（愛知）が初めての優勝を飾った。同種目は今大会から競技規則の改正があり、レース前のコース抽選の結果により、最初の周回はその順番通りに走行することになった。

45 名の出場者が 5 組に分かれて行われる予選、1 組は脇本雄太（福井）が最終周回から発進し、ゴール前で山田義彦（埼玉）の急襲を受けるも最初に入線。

2 組は打鐘から平原康多（埼玉）が先行、その後方から木暮安由（群馬）が抜け出し 1 着。

3 組は武田豊樹（茨城）と小倉竜二（徳島）が最終周回で主導権を争い武田が先行するも、3 番手に控えていた園田匠（福岡）が捲りきり最初にゴール線を通過。

4 組目は打鐘前から吉澤純平（茨城）が大逃げを打ち、7 番手にいた深谷が最終周回から猛追。バックで吉澤を捉えるも深谷の後方にいた山田英明（佐賀）が差して 1 着。

5 組は大塚健一郎（大分）が松岡貴久（熊本）を連れて残り 2 周から先行。車間が大きく空く中、最終 3 コーナーで松岡が大塚を交わしてゴールに向かうも、猛追した浅井康太（三重）がゴール前で松岡を捉え先頭で入線した。

各組上位 5 名と 6 着から抽選で勝ち上がった 2 名による 1 / 2 決勝。

第1組は平原が先行するも最終ホーム手前から8番手にいた脇本雄太（福井）が捲り、前段の選手を一気に飲み込み1着でゴール。2着は山田義彦、3着は三谷竜生（奈良）。

2組は新田祐大（福島）が浅井をつれて最終ホームで発進し、両者ともそのまま入線。3着は中村浩士（千葉）となった。

3組は抽選で決められた順番のまま最終周回を迎え、井上昌己（長崎）が先行。その後方に位置した深谷が一気に捲り先頭でゴールイン。2着は原田研太郎（徳島）、3着は稲川翔（大阪）。

今大会のフィナーレを飾るケイリン決勝。抽選で1コースを引いた浅井が残り2周から先行し最終ホームを一列棒状のまま通過。1コーナーで深谷が捲りを放つ。浅井の2番手の原田、また後方にいた脇本も猛追するも深谷を捉えることができず、2着に4車身の大差をつけて深谷がゴールした。2着は新田、3着は稲川だった。

スプリント



スプリント決勝の河端ⓈVS 渡邊Ⓢ

スプリントは渡邊一成（福島）が貫録の走りで9年ぶり3回目の優勝を飾った。

27名の出場者による予選200mタイムトライアル。第一出走者の荒井崇博（佐賀）のタイムは11秒111。第3出走者の成田和也（福島）が最初の10秒台（10秒879）を出す。以後9名の選手が挑戦するも成田の記録を超えることが出来ない。13番目スタートの佐藤友和（岩手）が・秒736でトップに。その後16番目に出走した渡邊一成が10秒388を叩き出し、佐藤を抑えて1位へ。以降の11名の出場者はそれを上回ることが出来ずに終了。前年優勝者で同種目5連覇を狙う中川誠一郎（熊本）は5位。この結果、タイム上位16名の選手が1/8決勝へ進出した。

1/8決勝は予選のタイム上位8名が順当に勝ち上がり1/4決勝も同上位4名が勝ち上がったが、中川誠一郎（熊本）は根田空史（千葉）の逃げを差し切れずにここで敗退。5連覇は達成出来なかった。

1/2決勝からは3本勝負。1組目の渡邊と根田の1回戦は後方の渡邊が終始、根田にプ

レッシュャーをかけ続けて最終バックから捲り、先勝。2回戦も渡邊はインスタートで先頭に位置するも1周目の3コーナーで根田と入れ替わり1回戦同様捲りで大差をつけて決勝に進む。白熱したのは金子貴志（愛知）と河端朋之（岡山）による2組目。1回戦は金子が捲りを打ち河端に先勝した。2回戦は金子が先行。河端がそれを追い、ゴール手前で差し切り、1対1のタイに。3回戦は残り1周で河端が先行、金子が猛追するも及ばず、河端の決勝進出が決まった。

渡邊と河端の決勝1回戦は河端を押し出すように先行させた渡邊がそれを捲り切り先取。2回戦も前を取った渡邊が最終周回に河端を先に発進させ、それを難なく捲り、平成20年以来3度目の優勝を飾った。また、3位決定戦は先行した金子が根田の猛追を振り切り3位となった。

1 kmタイムトライアル



1 km T Tを連覇した早坂

1 kmタイムトライアルは昨年の伊東大会でリオオリンピック代表の渡邊一成を制して初優勝を飾った早坂秀悟（宮城）が連覇を果たした。

最初から5名までの出走者の中での最上位タイムは滝本泰行（岡山）の1分5秒346だったが6番出走の大槻寛徳（宮城）が1分4秒266をたたき出し、場内がどよめく。以降の出走者がこのタイムを超えられない中、最後の3名を迎える。14番目の出走者である、前回4位の竹内雄作（岐阜）が1分4秒468、1番目の出走で同3位の加賀山淳（千葉）が1分5秒104とそれぞれ大槻の記録を上回ることが出来ず、場内は「下剋上」の期待に包まれた中、最終出走者である前回覇者の早坂の出番を迎えた。

宮城の武将「伊達正宗」の陣羽織をイメージしたサイクルジャージを身に纏った早坂は同県の大槻の記録を目指してスタート。ラップごとに大槻の記録を上回り、唯一、1分3秒台の記録で昨年優勝の賞録を見せつける結果となった。早坂は表彰式後のインタビューで「大槻さんが良い意味でプレッシャーを与えてくれたから優勝することができたと思う。宮城

でワンツーフィニッシュを決められたのはうれしい」と二重の喜びを語った。

チームスプリント



チームスプリント表彰台

チームスプリントは関東地区・栃木チームが中部地区の3連覇を阻み13年ぶりの優勝を果たした。

1番目の出走チームは近畿地区の福井・兵庫混成チーム。タイムは1分17秒718。

続いては1kmタイムトライアルで優勝した早坂秀悟（宮城）を擁する北日本・宮城チーム。阿部力也、菅田壱道と順調につなぎ、最終周回へ。最終走者の早坂秀悟は1kmの疲れを感じさせず力走し1分14秒605でゴール。前走の近畿に3秒以上の差をつけた。

3番目に出走の四国地区・香川チームは1分16秒627で北日本のタイムを上回れなかった。

4組目の関東地区。小田倉勇二、長島大介、金子幸央の3名は昨年11月の地区プロを制したメンバー。1周目、2周目のラップが27秒679、50秒862と軽快に刻み、タイムは1分14秒15と北日本の記録を上回る。

5番目の九州地区・熊本チーム、6番目の中国地区・岡山チームはそれぞれ関東のタイムを超えることができずに7番目の中部地区・岐阜チームを迎える。別府、伊東と連覇を果たした同地区のタイムが注目されたが、1分15秒64と4位に終わる。

最後の南関東地区・神奈川チームも1分15秒643と関東の記録を上回ることにはできず、関東が栄冠を手にした。

チームパーシュート



チームパーシュート優勝の南関東

4 kmチームパーシュートは南関東・神奈川チーム(小原太樹、嶋津拓弥、堀内俊介、佐々木龍)が大会記録で優勝した。

1組は九州地区・大分チームと四国地区の香川・高知混成チームの対戦。序盤は四国がリードしたが、九州が中盤で追いつく。雌雄は決したと思われたが九州が9周回目に先頭交替時の接触落車により棄権。四国のみがゴールした。

2組は関東地区・茨城チームと中国地区の岡山・山口混成チームの対戦。序盤から関東が快調に周回を重ね、中国を引き離す展開。双方とも第4走者が離れるも8周目バックで関東が中国を追い抜き先にゴール。

第3組は京都、大阪、奈良と兵庫の4選手からなる近畿地区と南関東地区で行われた。南関東は3周目のラップが関東を3秒程度上回り、好記録の予感を漂わせる。7周目で3名となったものの、第61回大会で近畿地区が出した大会記録(4分24秒333)を塗り替えてトップに立った。

北日本地区の青森・秋田混成チームと中部地区・岐阜チームによる4組は、昨年の覇者である北日本が南関東の記録を超えることができるかが注目された。両者は7周目までは鎗を削る戦いでラップも拮抗していたが終盤で北日本が地力を見せつけ先着。しかしながら、南関東の記録を上回ることができず、2位にとどまった。

個人パーシュート



個人パーシュート初優勝の渡邊正光[Ⓜ]

4 km個人パーシュートは渡邊正光（福島）が初めての栄冠を手にした。

前年優勝の北津留翼（福岡）は不出場のため、今大会は8選手により競技が行われることになった。

第1組の横内裕人（愛媛）と高田大輔（岡山）の対戦は横内が終始高田を圧倒し、地区プロで出したタイムを8秒近く上回る4分50秒856でゴールした。

第2組の成松春樹（佐賀）と須賀和彦（茨城）がそれぞれ、4分44秒002と4分46秒254を出して横内のタイムを抜きトップと2位を占める。

第3組の荒木伸哉（静岡）と谷口明正（三重）との対戦は谷口が先着するも成松のタイムを上回ることにはできず第4組を迎える。

第4組は平成25年から一昨年の別府大会まで3連覇を果たし、去年は2位の岡嶋登とやはり昨年3位の渡邊正光との対戦。出だしは岡嶋が積極的なレースを展開し、前半の5周目までに渡邊を約3秒引き離す走りを見せる。これに対して渡邊は後半から徐々に差を縮め、9周目で逆転し、最後は4分42秒29でトップタイムをたたき出し、初優勝を飾った。2位は成松、3位は須賀となった。

エリミネーションレース



エリミネーションレース優勝の小林潤二

エリミネーションレースは小林潤二（群馬）が2年連続、3度目の優勝を果たした。

1周ごとに最下位者が抜けていくこの競技は、24名の選手によって争われることとなった。フライングスタートの後、競走の幕が切って落とされた。2回のドロワー（敗退者なし）周回を挟み、気温が30度に近くなる中で戦いは熾烈を極め「競走」というよりは「戦い」という感じになってきた。

前回と3年前の準優勝である松尾信太郎（福岡）と椎木尾拓哉（和歌山）が序盤で退き、ラスト2周で残った選手は小林、根本哲吏（秋田）、西村光太（三重）の3人。同2コーナーで小林が間隙をついて、大逃げを打つ。おいていかれた二人は追うことができずに小林がタフな戦いを制した。2位は根本、3位は西村が入った。